ふれあい福住
第 60 号
題 字
佐々木千代三郎
福住地区町内会連合会
福住地区社会福祉協議会
会長　戸崎良英
発行責任者
ふれあいセンター福住
センター長　渡部秀雄

迅速、正確！
北海道新聞
道新スポーツ
のご用命は
㈱どうしん中川
☎852－4138

スウェーデンはなぜ出生率が高いのですか
－目指したのは男女平等－

児童・高齢者男女平等省
副大臣　バニラー・バラルト氏

スウェーデンの子育て支援などの政策について、バニラー・バラルト氏に聞いた。まず、出生率がなぜ高いか。子育て支援の充実はもちろんだが、パートナーの男性が子育てや家事に積極的に参加し、女性だけに任せていない点です。母親は子供が1歳ぐらいになるまで育児休暇を取りますが、その後は父親に代わり、母親は職場に復帰します。それは、人口増加を目指した政策だからか？に対し、女性が「仕事か子どもか」という選択ではなく、仕事も子どもも両立できる社会の実現と男女平等が基本です。

男性の家事協力が大切

結果的に人口が増えているが、目的ではない。育児休業への給与補償や保育所の待機ゼロに手厚くしている。また、子育て制度の整備に財政負担が、に対し、「負担と考えるべきではない」。子育てや介護の仕組みを整えれば女性が働きやすくなり、会社から給与をもらって国に税金を納める。社会保障が安定すれば、国の財政にも好循環が生まれる。問題点として、少子高齢化は先進国共通の課題だ。スウェーデンも同じで、年金制度の改革（抑制）、社会保障全体の持続可能な仕組みは継続課題です。

女性の労働と国家財政

最後に、日本の現状にアドバイスを求めると、女性に「仕事か子どもか」ではなかなか産む人はいない。鍵を握っているのは会社です。顧客に製品やサービスを提供することだけが、企業の役割ではない。働いている人のワークバランスが大切。そして、政府はそういう企業を法律や制度で支援することです。欧州の若い世代ほど、就職先に、企業が家庭生活を重視しているか否かに注目します。日本もその観点に立つべきです。

今年も元気なみなさんでした
ひなまつりふれあい昼食会

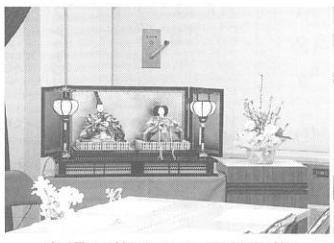
3月3日㈫午前11時から、福住地区会館において「高齢者ひなまつりふれあい昼食会」が行われました。あたたかい日差しの中、独り暮らしの70歳以上、80歳以上の高齢者及び一歩会、町内会長、食生活改善、福祉推進員など117名が参加して行われました。

まず、戸崎良英（福住地区社会福祉協議会会長）のあいさつのあと、豊平区介護予防センター東月寒・福住の山本ゆかりさんによる「脳トレ～頭の体操」が行われた。その後、つくしの会の皆さんによる「津軽三味線」で「黒田節」「炭鉱節」「斉太郎節」などなど。最後に「ソーラン節」を三味線の音に合わせて元気よく歌っていただきました。ひな祭りの楽しみは何といっても「昼食会」です。「ちらし寿司」「お吸い物」「ゼリー」の他に「桜餅・うぐいす餅」「甘酒」などを手を合わせて「いただきます」。みんなで会食を楽しみました。

温かい日和のふれあい昼食会でした

午後2時、ふれあいセンター福住センター長の渡部秀雄さんが「来年もお元気でお会いしましょう」と締めくくった。今回欠席の90名には、民生委員、福祉推進員より「ボックスティッシュ」、「クッキー」、「甘酒」のお土産が手渡され、安否の確認を行われました。

あいさつする戸崎良英会長


会場に飾られたおひな様

見事な演奏に聞き入る参加者

ふくふくキッズ

今年は、原則として毎月第3月曜日開催として計画（但し、7月～9月、12月は第2月曜日、2月は第4月曜日）、年12回実施し、延べ人員578名（平成26年度は517名）が参加しました。1回平均48・1名が参加しております。13名のスタッフで、母親と幼児のスキンシップの場をつくり、いろいろな遊具、本の読み聞かせ、音楽に合わせた人形のダンスなどで子どもたちに好評です。

11月17日には、子育て支援ワーカーズプーのいえ小川京子さんの手遊び唄や絵本作家ひだのかな代さんの読み聞かせなどがあり、73名の親子連れに楽しんでいただきました。

子どもたちは大喜び

日帰りふれあい交流会

10月9日〔木曜日〕午前9時、なんぽろ温泉ハート&ハートの送迎バスで60名が福祉地区会館を出発。この事業は赤い羽根共同募金助成金利用事業です。

到着後、パークゴルフを楽しむ32名は、それぞれチームを組んで午前中プレーを楽しみ、残りの皆さんは、温泉やカラオケを楽しみました。正午は皆さん揃って昼食をいただいた。その後、カラオケで午後2時半まで楽しみ、送迎バスで午後3時半地区会館に到着。楽しい日帰り旅行でした。

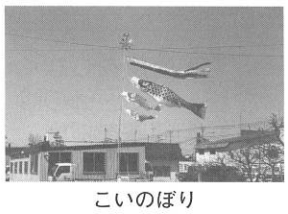
楽しい一日でした

介護予防活動状況

平成26年度介護予防活動実施結果は、各老人クラブ、さつき花かご会、ふれあいセンター福住及び各町内会のご協力により、計画通り実施されました。（41回、延べ実施人員1、351名）。実施実績は昨年より2回多く、実施人員は26名減でした。

活動内容について、①転倒予防14件（転倒予防体操、ふまねっと2件、散歩・体ぽかぽか、笑いヨガ、体力測定等）②病気予防12件（口腔予防3件、認知症予防3件、冬の健康管理2件、感染症予防、高血圧予防等③パークゴルフ・昼食会5件④生活機能チェック4件等が実施内容です。来年度も、豊平区介護予防センター東月寒・福住及び豊平区第2地域包括センターのご指導を受け、高齢者の皆様が元気で活動できるよう努力して行きたいと思います。

熱心に聞く参加者


こいのぼり

危険！お金の電話

―だましの言葉、千変万化―

息子や孫をかたり、「カバンをなくした」などと言ってお金を要求する「おれおれ詐欺」がひんぱんに起きている。中には「還付金」や「名義貸し」といった名目でだます事例が多い。「オレだけど…」と、身内の気遣う心理を悪用する特殊詐欺の古典的手口は、３月に入って道内だけで約１億７千万円に上ることがわかった。全国的には、03年頃から被害が増加し始めたが、「だまされたふり作戦」などの対応にもかかわらず、被害額は増える一方だ。新たな手口に「あなたの名義が使われている。

名義貸しであなたも罪に問われる」「○○株を代わりに買ってくれれば高く買い取ります」。これは、トラブル解決を吹っかける「脅迫型」だ。「違法行為で拘束される」「株取引で勝手に使われた名義を消す必要がある」など、被害者を不安にさせる内容だけに、被害が高額になりやすい。登別市で80代の女性が約１５００万円だまし取られた被害も架空請求だ。団体職員や弁護士を名乗る男から架空のトラブルを持ち出され、「和解金が必要。支払わなければ裁判にする」と脅迫。また「あなたや家族が逮捕される」などとして、架空の金融商品について「代わりに買ってくれれば高く買い取る」などという手口もある。

道内だけで１億７千万円

さらに、「高額医療費・税金を還付します」では、「現金自動預払機（ATM）に行ったら携帯で電話して」という手口が道内で急増しているが、犯人側の口座に振り込みさせられたケースだ。厚別区で80代の女性が「区役所職員」を名乗る男から電話で「高額医療の還付」を持ちかけられ、約50万円を振り込む被害になった。詐欺グループが利用したとみられる名簿を道警が入手したところ、全国にまたがる「高額健康食品購入者」「訪問販売のリフォーム契約者」と記入され、「ホメないと話さない」「せっかちな性格だが話せる」「ダイヤモンドに興味がある」など、電話で得た情報も書き加えられていた。道警では、事前に情報が知られている可能性があると警告している。

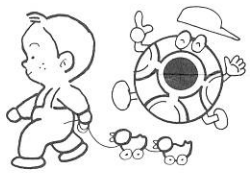
「お客様」の名簿に合印

少子化対策

北欧からヒント

道新「読者の声」より

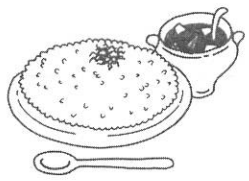
テレビで「北欧・フィンランドの不思議に迫る」という番組を見てカルチャーショックを受けた。消費税が24％と重税だが、学費、給食費、医療費が無料だ。日本の場合は消費税を増税したが、財政は良くなったのか。逆に使い道が不透明で、国民の生活は苦しくなるばかりのようだ。フィンランドでは、妊婦には赤ちゃんの衣類やおむつなどが無償で配布されていると。しかも、ベビーカー連れは公共交通機関は無料で、専用席もある。



夫婦共働きが多いので保育園の待機児童は皆無だ。子どもが病気になると一時的な育児休業もある。お母さんに優しい子育て先進国である。学校の授業では、子どもの自主性や協調性を重視している。テストや受験、親のためでなく、自分自身のために学び、社会で自立していく力をつけさせる教育に徹底しているという。日本もフィンランドのまねをすればよくなるかと言ったら…。そう簡単に思えない。しかし、これをヒントに子育て支援を充実させれば、安心して子育てできる国となり、少子化対策にもつながるのではないかと思った。

目立つ市民の「朝食抜き」

札幌市は、本年度の市政世論調査の結果をまとめた。食生活に関して「朝食を取っていない20代男性の割合が40％を超え、全国平均（昨年度、以下同じ）を約10ポイント上回った。30、40代男性も「朝食抜き」の割合が全国平均を上回っており、市は保健センターや市教委と連携して、朝食と健康づくりの関係について啓発活動を強化する方針だ。朝食を取っていない男性の割合は、20代が43％（全国平均30％）、30代が38％（同26％）、40代が32％（同２％）、全体では22％（同14％）。女性全体は16％（同10％）だった。午後10時以降に夜食を取っている男性の割合は、20代が21％、30代が18％、40代が15％で、全体では10％だった。市は「朝食を食べない人は、夜遅くに食事を取る傾向があるとし、生活習慣を見直すような方策を検討したい」としている。また、体格指数（ＢＭＩ）が肥満に該当する数値では、男性が26％、女性は15％。痩せ形は、男性４％、女性19％だった。調査は無作為抽出した18歳以上の市民１５００人を個別に訪問、95％の回答を得て割り出した。



～道交法改正案「疑い」で診断書提出～

75歳以上認知症の検査強化へ

75歳以上のドライバーを対象に認知症検査を強化する道交法改正案が閣議決定した。２０１３年の１年間で、全国で約８万（75歳以上）７千人が免許を返納。同年末時点で75歳以上の免許保有者は約425万人。道内では、08年に13万３５２３人が13年末で18万７２６０人と４割も増加。返納は１年で（13年）２０７３人。

現在75歳以上には３年ごとの免許更新時に認知機能検査を実施し、３段階に分類している（左図参照）。改正案は、速やかな医師の診断書の提出を課し、第２、第３分類でも逆走などの違反をすれば臨時検査を義務付けた。認知症の進化を危惧し、チェックを強化する方針だ。

75歳以上を対象とした道交法改正案の概要

現在	改正案
3分類・2分類：違反をしても医師の診断書の提出や検査の再受検の必要なし	3分類：違反をしたら臨時の検査を受検。1分類に降格したら医師の診断書を提出 2分類：違反をすれば臨時検査を義務付け
1分類：違反をしたら医師の診断書を提出	1分類：違反をしなくても医師の診断書を提出

※認知症と診断された場合は免許取り消しか停止

４万人 大興奮

大谷飛躍へ新たな道

ファイターズの大谷翔平投手は初の開幕投手を見事に白星で飾った。序盤に乱れた制球をしっかり立て直す落ち着きぶりをみせた。「勝ちを計算できる投手になりたい」。プロ入り３年目の20歳は、理想の自分を追いかける。野球少年がそのまま大人になったような姿勢は、入団時と変わらない。練習に打ち込む姿には栗山監督も舌を巻く。

力投する大谷翔平投手

大谷投手にとって練習とは「足りないことを考えて、必要な時にやること」。続けて「義務的にやるのは練習じゃない」。投打のどちらが好きか―、に「どちらも楽しいので絞れない」。今年の正月、岩手の自宅に帰省し、父の徹さん（52）に「優勝に貢献したい」と話した。「チームのことを考える余裕がでてきたようだ」。若者が時代を変える幕末の歴史を好む。「人の後ろをついて歩きたくない」。新たなスタートが始まった。